

Ⅲ 企業就労アセスメント実習の取組

Ⅲ 企業就労アセスメント実習の取組

1. はじめに	105
2. 取組の経緯	105
3. 事例	112
4. まとめ	119

Ⅲ 企業就労アセスメント実習の取組—本校高等部進路指導の充実・改善—

1. はじめに

(1) 問題と目的

進路指導は学校の進路指導主事が中心となって行うが、最終的な進路指導の決定や判断は、当該生徒の保護者と直接やりとりする学級担任に委ねられることが多い。そのため、進路指導の決定や判断は学級担任の経験や指導方針、考え方や保護者の子どもに対する評価に左右される場合がしばしばある。

また、本校では一般就労を希望する生徒を対象とした進路指導において、生徒自身の主体性と自己選択・自己決定にもとづいた指導や意思決定支援がやや弱い側面があり、進路の自己選択・自己決定のための職業理解や自己理解を深める学習活動や進路懇談の更なる充実が望まれる。

つまり、進路指導には「就業体験等を体験で終わらせず、体験を価値付け・意味付けし、経験に変えていく取組」「これまでの体験と今回の体験、それらの振り返りや比較をもとに意味付けし、今後の進路を考えていく取組」が必要となる。

これからは、生徒自身が自分の進路について、自己理解や職業・職務理解のもと、主体的に学び、考える進路指導を行うことが求められると考える。

以上のような背景を踏まえて、本校高等部の進路指導の充実・改善を目指すための新たな取組を探ることを目的とした実践研究に着手した。

そこでそのための手立てとして、企業就労を希望する生徒を対象とし、現場実習を通して、企業就労アセスメントを行い、その結果にもとづいた進路指導や学習活動を行うこととした。そうすることで、生徒自身・教師・保護者が、対象となる本人自らの得意不得意を把握し、現場実習や学校生活、地域・家庭生活の体験や経験を活かして、自己理解や生徒理解と職業・職務理解を進め、職務とのマッチングを主体的に行うことが期待できるのではないかと考えている。

(2) 方法

上記の手立てを具体的に実現するために、「学校」・「家庭(保護者)」・「地域の就労移行支援事業所」が連携・協力し、1年夏期から2年前期まで段階的に3回の企業就労アセスメントのための現場実習を行う。それらを通して生徒の自己理解や自己認識を促し、職業適性や課題等を多面から評価し、生徒自身が自分の進路について考える進路指導を計画的に実施することとした。

2. 取組の経緯

企業就労アセスメント実習は平成26年度から取り組み始めた。毎年の成果や課題を踏まえて改善を積み重ねて、この3年間で表Ⅲ-1のような経緯となった。

表Ⅲ－１ 平成 26～28 年度における企業就労アセスメント実習実施状況

	平成26年度			平成27年度			平成28年度		
	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生
前期	職場見学	企業就労アセスメント実習 事業所内 3日間	現場実習 企業・その他	職場見学	現場実習 企業・その他	現場実習 企業・その他	職場見学	企業就労アセスメント実習 施設外就労先・ 事業所内 2週間	現場実習 企業・その他
夏期							企業就労アセスメント実習 事業所内 3日間	企業就労アセスメント実習 施設外就労先 3日間	
後期	企業就労アセスメント実習 事業所内 3日間	現場実習 企業・その他	現場実習 企業・その他	企業就労アセスメント実習 事業所内 1週間	現場実習 企業・その他	現場実習 企業・その他	企業就労アセスメント実習 事業所内 2週間	現場実習 企業・その他	現場実習 企業・その他

※平成 26 年度は初年度のため、1 年時に体験していなかった 2 年生も対象とした。

(1) 一年次（平成 26 年度）の取組

①取組の概要

金沢市内にある就労移行支援事業所で、実習（3 日間）と事後のケース会を試行した。対象は、一般就労を希望する高等部 1 年生、2 年生とした。

②成果と課題

- ・ 生徒は、働くうえで必要なことを身を持って体験できた。また、生徒への各支援員の対応が同じ基準であり、生徒にとって分かりやすいものであった。
- ・ 実習の 3 日間だけが大切なのではなく、実習中の生徒のエピソードをもとに、教師が生徒や保護者と懇談をしたり、教師間で話し合ったりすることで、各生徒の課題を明確化ができた。
- ・ 3 日間の実習では、アセスメントの期間としては十分ではなかった。
- ・ 企業就労アセスメント実習の仕組づくりのため就労移行支援事業所の支援員と本校教員との間での話し合いを増やす必要がある。

(2) 二年次（平成 27 年度）の取組

①取組の概要

一年次の課題を受けて二年次である平成 27 年度は新入生を対象に、2 年間の企業就労アセスメント実習を開始した。1 年目の間に就労移行支援事業所内での実習、2 年目の前期に施設外就労先の企業での実習を実施することとした。

ア. 一年次からの改善点

- ・ 金沢市内にある就労移行支援事業所で、後期（10 月）に、実習（1 週間・事後のケース会含む）と事後のケース会を行った。対象は、高等部 1 年で一般就労を希望する生徒とした。就労移行支援事業所と本校との連絡会は年間に 4 回実施した。

- ・ 実習前に、就労移行支援事業所と学校とで、生徒の実態について共通理解を図ることを目的としたケース会を実施した。
- ・ 評価に就労移行支援事業所が作成・使用している「就労準備到達表」を使用し、生徒本人・教師・就労移行支援事業所の支援員の三者で共通した観点で実習の評価を行った。

②成果と課題

- ・ 実習前に、学校と就労移行支援事業所とでケース会を行うことで、生徒に関する情報を共有して実習を行うことができた。
- ・ 就労準備到達表を用いたことで、生徒・教師・就労移行支援事業所の支援員の三者が、生徒の現在の様子について同じ観点で評価をすることができた。そして、評価をもとに、実習後の目標を設定することができた。
- ・ 就労準備到達表の項目のうち、1週間の実習では評価できない項目がいくつかあった。実習期間や評価項目について検討する必要があるがあった。
- ・ 企業就労アセスメント実習の際の服装を制服としたが、身だしなみについて評価するためには制服ではなく、ビジネスシーンにあった服装にしたほうがよかった。
- ・ 1週間の実習では、アセスメントの期間としては十分ではなく、2名の生徒に対し、追加実習を行なった。

(3) 三年次（平成 28 年度）の取組

①取組の概要

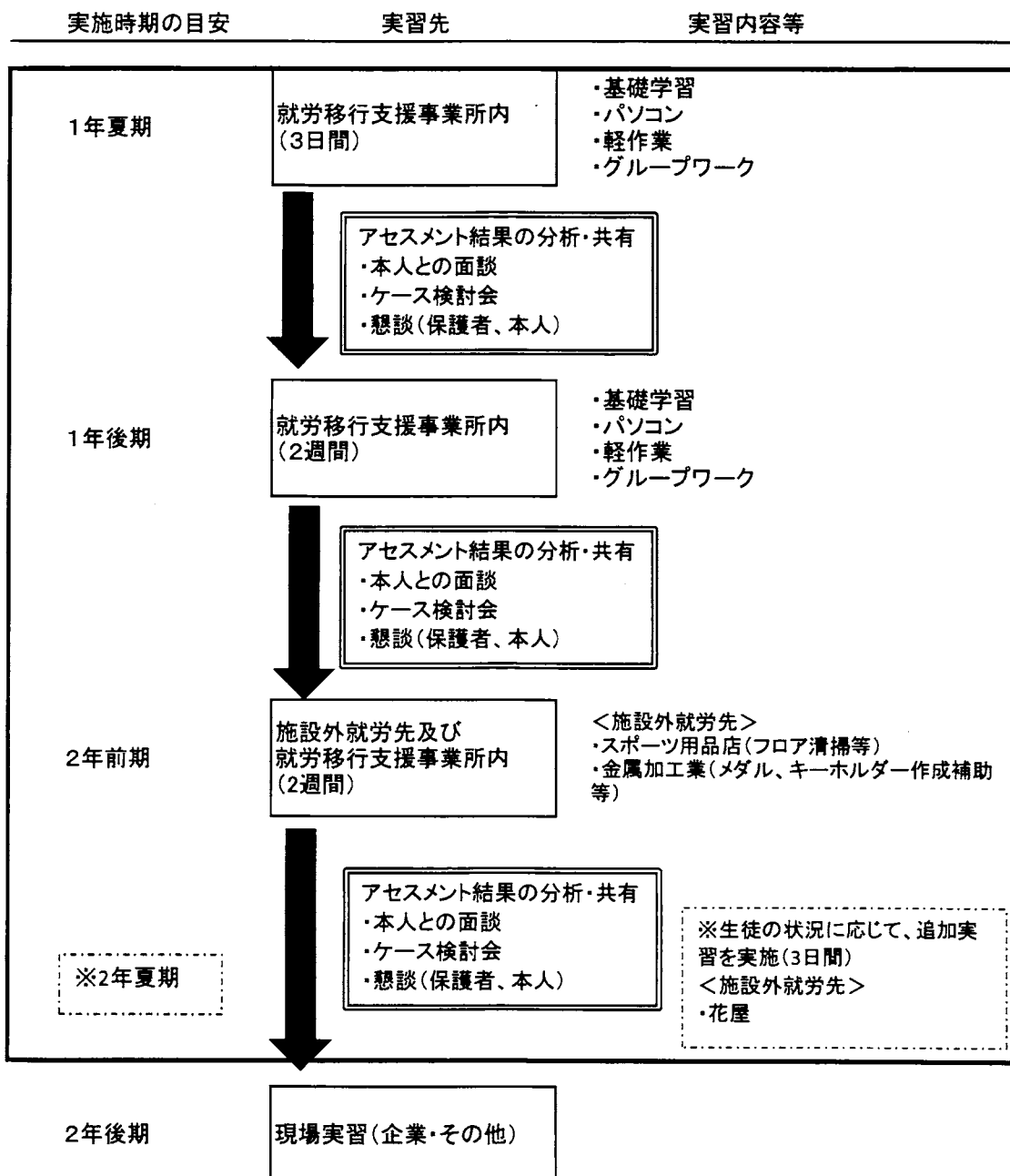
ア. 二年次からの改善点

二年次からの成果と課題を受けて、三年次は、企業就労アセスメント実習を以下のように改善した。

- ・ 高等部 1 年（平成 28 年度入学生）は、夏期に 3 日間の企業就労アセスメント実習を新設した。後期の実習は、1 週間から 2 週間に延長した。
- ・ 前年度使用した就労準備到達表を参考に学校独自の企業就労アセスメント実習評価表を作成し、生徒本人・就労移行支援事業所の支援員・保護者の三者で共通の観点で実習の評価を行った。新しい評価表は、高等部 1 年（平成 28 年度入学生）の後期の実習から使用した。
- ・ 高等部 2 年（平成 27 年度入学生）は、前期に、施設外就労先を主とした企業就労アセスメント実習を 2 週間実施した。生徒の状況に応じて、夏期に施設外就労先での追加実習を 3 日間実施した。
- ・ 企業就労アセスメント実習の終了後、各生徒の評価をもとに長所や課題、今後の方向性等について高等部の教師全員で話し合いを行った。
- ・ 服装は、制服とせず、ビジネスシーンにあった服装にした。

イ. 企業就労アセスメント実習計画と内容の確立

次の図Ⅲ-1 が、企業就労アセスメント実習計画と内容について示したものである。



図Ⅲ－1 高等部企業就労アセスメント実習の仕組（平成28年度）

ウ. 企業就労アセスメント実習に関わる一連の取組

次の表Ⅲ－2は、1年生（平成28年度入学生）の年間における企業就労アセスメント実習に関わる一連の取組について示したものである。表Ⅲ－3は、2年生（平成27年度入学生）が前期に行った、施設外就労先を主とした実習のスケジュール、表Ⅲ－4は、夏期追加実習の内容である。表Ⅲ－5は、1年生（平成28年度入学生）が夏期及び後期に行った施設内での実習内容を示したものである。

表Ⅲ－２ 1年生（平成28年度入学生）における企業就労アセスメント実習に関わる一連の取組

時期	取組	内容等
4月	企業就労アセスメント実習の説明	保護者懇談で、趣旨や見通しを説明し、理解してもらった。
6月	職場見学（進路行事）	就労移行支援事業所を見学し、生徒と保護者が事業所の説明を受けた。
7月上旬	<ul style="list-style-type: none"> 本人への企業就労アセスメント実習の説明 事業所訪問と事前挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> 目的や内容について本人への説明を行い、実習の意味付けと見通しを持てるようにした。 事前挨拶も兼ねて、利用者の方の様子（服装や持ち物など）や、実際の作業などを見学した。
7月下旬 （夏季休業中）	企業就労アセスメント実習（1回目）	<ul style="list-style-type: none"> 就労移行支援事業所内 3日間 実習内容は表Ⅲ－5参照
9月初旬	生徒との面談（1回目）	「進路」の授業の中で、生徒個人と面談し、実習について振り返り、所感や課題と思うことを書くようにしたり、聞き取ったりした。
9月下旬～ 10月初旬	<ul style="list-style-type: none"> 企業就労アセスメント実習評価表について 実習前自己評価記入 	<ul style="list-style-type: none"> 後期の実習より導入した「企業就労アセスメント実習評価表（※後述）」の説明 夏期の実習や生活を振り返って、実習前自己評価を記入するようにした。
10月中旬	企業就労アセスメント実習（2回目）	<ul style="list-style-type: none"> 就労移行支援事業所内 2週間 実習内容は表Ⅲ－5参照
10月下旬	実習後自己評価記入	実習（2回目）や生活を振り返って、自己評価（実習後）を記入するようにした。
11月	<ul style="list-style-type: none"> 企業就労アセスメント実習評価表記入（就労移行支援事業所、保護者） 生徒との面談（2回目） 	<p>就労移行支援事業所と保護者にも生徒と同じく、企業就労アセスメント実習評価表を記入してもらった。（事前に説明）</p> <p>「進路」の授業の中で、生徒個人と面談し、実習を振り返った。その際、企業就労アセスメント実習評価表を用いて、①実習前後の自己評価、②実習後の自己評価と他者（上記二者）評価の2点の比較をしながら、所感や成果、課題等を聞き取った。</p>
	三者懇談 （担任、生徒、保護者）	<ul style="list-style-type: none"> 実習の様子、本人の課題や実態を共有する。 個別の指導計画に実習から出た課題等を反映させたことや今後の方針の共通理解をする。
	高等部でのケース検討会	高等部の全教員が、実習を通しての本人の課題や実態等を共有し、それらから読み取れる本人の内面の変化など推察し、今後の支援や指導を検討した。

表Ⅲ－3 前期・企業就労アセスメント実習スケジュール（2年生・平成27年度入学生）

1週目	月	火	水	木	金
午前	A社	B社	B社	B社	就労移行支援事業所内での実習
午後	就労移行支援事業所内での実習				

2週目	月	火	水	木	金
午前	A社	B社	B社	B社	登校
午後	就労移行支援事業所内での実習				ケース会

A社…スポーツ用品店（作業内容：清掃、床のモップがけ）

B社…バッヂ、キーホルダー等製造会社（作業内容：製品のバリ取り、袋入れ、汚れ落とし等）

※月曜・第1週の金曜は、就労移行支援事業所に出勤。火・水・木曜は、B社に出勤。第2週の金曜の事後のケース会は、就労移行支援事業所で実施。

表Ⅲ－4 夏期追加実習の内容（2年生・平成27年度入学生）

	内容
C社…花屋	包装ビニールのシールはり、花巻き、紙取り等

実習期間：3日間（午前・午後）C社に出勤

表Ⅲ－5 夏期・後期・企業就労アセスメント実習の内容（1年生・平成28年度入学生）

プログラムの名称	内容
基礎学習	メモ取り、認知課題、ピッキング、数値チェック、封筒の分類 等
パソコン	数値入力、文章入力 等
軽作業	ボールペン組立、プラグ・タップ組立、外注作業 等
グループワーク	ビジネスマナー 等

*半日ごとに1つのプログラムを行う。

エ. 企業就労アセスメント実習評価表の作成

昨年度は、1年後期に実施した事業所内でのアセスメント実習において、就労移行支援事業所が作成・使用している「就労準備到達表」を評価に使用した。施設外就労先の企業を中心にした実習では、担当者が常に実習生に付き添う訳ではなく、「就労準備到達表」での十分な評価が難しいという理由で、使用しないこととした。しかし、企業就労アセスメント実習を進めていく中で、生徒の自己評価・他者評価を行い、長所や課題を分析し、共通理解を図り、進路指導に生かしながら、生徒の変容を追っていくためには、新たな評価表の必要性が改めて認識された。そこで、就労準備到達表を参考に評価項目を検討し直し、就労移行支援事業所の了解を得て、学校独自の「企業就労アセスメント実習評価表（以下、評価表）」（表Ⅲ－6）を作成した。この評価表は1年生（平成28年度入学生）の後期の実習から使用することとした。

作成にあたっては、前年度使用した「就労準備到達表」を参考に、一般就労を目指すにあたって高等部段階で大切だと考えられる項目を高等部で協議して決め、就労移行支援事業所にも確認を取り共通理解のうえ、21項目を設定した。

評価には、5段階の評価点をつけるという方法を取った。この評価表は実習後に、本人・就労移行支援事業所・保護者がそれぞれ記入することとした。なお、本人については、実習前と実習最終日にそれぞれ記入することとした。(実習最終日の就労移行支援事業所とのケース会の際に、担任や就労移行支援事業所の話聞いた後では、自己評価が変わってしまう可能性があるため、実習最終日の反省会の前に記入する)

この評価表を使用するにあたり、この評価表は、評価を点数化してその「高低」を評価するのではなく、生徒個人内の点数の「変化」や他者(就労移行支援事業所・保護者)との「比較」を通しての読み取りをするためのものであることに留意した。

表Ⅲ-6 企業就労アセスメント実習評価表 本人用
企業就労アセスメント実習 評価表

実習生： 記入日： _____ 月 _____ 日

実習時期：

評価(記入)時期： 記入者氏名： _____

点数に○を付ける

大項目	項目	説明	評価
生活習慣	起床・就寝	自分で寝る・起きることができる 出勤に間に合うように起きる	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	身だしなみ①	寝ぐせ直し、鼻毛やムダ毛の処理、ひげそり、爪切り をしている	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	身だしなみ②	洗顔、歯みがき、入浴(シャワー)を毎日している	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	清潔①	着替え、汗やにおいの処理など、身体をキレイにするように心がけている	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	清潔②	服のシワ、汚れ、えりやそでの汚れ、黄ばみなどを気にしている 服、ハンカチやタオルなどを毎日替える、洗濯する	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	体調管理	食事、睡眠、病気の予防など、体調管理に気を付けている	1 - 2 - 3 - 4 - 5
コミュニケーション・社会性	服装	場に応じたシャツ、ズボン、上着、靴、ベルト、 くつ下、カバン(色や柄など)を身に付けている	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	あいさつ	相手に聞こえる声で、場所・時間・場合に応じたあいさつができる	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	返事・返答	相手に聞こえる声で、返事やお礼ができる 相手からの質問に答えることができる	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	報告・連絡・相談	作業中や作業後に、報告・連絡・相談ができる	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	質問	わからないことや、次に何をすればよいかなどを担当者に質問 できる(自分で勝手に判断しない)	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	言葉遣い	相手に応じて丁寧な言葉づかいができる(敬語)	1 - 2 - 3 - 4 - 5
作業能力	聞く態度	相手の話を途中でさえぎらず、最後まで、相手を見ながら聞く ことができる	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	集中・体力	1日の立ち仕事に時間いっぱい取り組める	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	正確さ・丁寧さ	手順や指示通りに作業ができる ミスが無いか確認できる 製品や道具などを丁寧に扱うことができる	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	作業スピード	時間をかけすぎずに、正確に作業ができる	1 - 2 - 3 - 4 - 5
態度	遂行態度	内容に関わらず、好き嫌いで選ばず、与えられた作業(仕事) に取り組むことができる	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	素直さ	注意、指摘、アドバイスを素直に聞き入れ、直そうとしている	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	正直さ	失敗や間違いをごまかさず(隠さず)に言える 言い訳をしないで、先にあやまることできる	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	耐性	イライラや疲れなどを人前で態度や言葉に出さないように できる	1 - 2 - 3 - 4 - 5
	余暇・休日	休みの日に、気分をリフレッシュするために取り組める趣味や 活動がある(している)	1 - 2 - 3 - 4 - 5

オ. 生徒の進路に関する検討会の実施

企業就労アセスメント実習終了後、2年生は、振り返りの中で自分の仕事の適性について考える時間をとった。教師は、就労移行支援事業所の今回の支援記録及び1年時の支援記録の内容を比較し、実習における生徒の「良い点」「前年度からの改善点・改善が見込まれる点」「課題」を抜き出した。このデータをもとに高等部教師全員で生徒一人一人について話し合いを持ち、生徒の後期の現場実習に対する方向性を定めていった。この結果をもとに懇談で本人や保護者と話し合い、後期現場実習先の選定を進めていった。

1年生は、前述の企業就労アセスメント実習評価表を用いて、本人・保護者・就労移行支援事業所から出た評価点と生徒個人との面談の聞き取り結果等をもとに、高等部教師全員で主に以下の点について検討し、共通理解するケース会を行った。

- ・ 今後の作業学習や教科学習等でどのような力を身に付ければよいか（学習内容や目標）
- ・ 企業就労アセスメント実習における評価から読み取れる本人の実態、課題や改善点
- ・ 実習で見えてきた本人の特性、実態や課題、評価表や普段の生活や授業等からうかがえる内面（変容）の推察
- ・ 評価点における実習前後の個人内の差や、三者の評価点の差、生徒との面談から推察されたことや本人の意見等の確認・共有
- ・ 授業や生活面における今後の本人の目標や実習で出た(本人が考えた)課題改善のための方策

カ. 保護者との進路懇談の観点の整理

企業就労アセスメント実習の実施に伴い、保護者との進路懇談の観点を以下のように整理した。

- ・ 3年間の進路指導の見通しと企業就労アセスメント実習に関する共通理解
- ・ 企業就労アセスメント実習の評価を通じた生徒の得意・不得意の共有
- ・ 企業就労アセスメント実習の評価を通じた学校及び家庭における取組の提示と共通理解
- ・ 企業就労アセスメント実習の評価を通じた職業適性及び進路先の見通しの提示と共通理解

キ. 企業就労アセスメント実習の評価結果の個別の指導計画への反映

実習の様子や評価、振り返り時の本人への聞き取り等から出た課題を後期の個別指導計画の個人目標に位置付けた。そのことについて、本人・保護者と三者懇談を持ち、企業就労アセスメント実習の実践を通して見えてきた課題を個人の目標とすることを高等部教師全員が共通理解し、各授業でこの目標を達成できるように取り組んでいくということを確認した。

また、そのために家庭生活でも協力してほしいことを依頼するなど、本人の目標や課題に対し、学校と家庭が同じ方向を向き、共通理解のもとに進めていくようにした。

3. 事例

次に、企業就労アセスメント実習を行なった生徒のうち、3名の事例を以下に述べる。

(1) 事例1 (B男・2年生)「企業就労アセスメント実習の実施により将来の進路先の選択肢が増えた事例」

①生徒の実態

B男は、1年後期、2年前期に企業就労アセスメント実習を実施した。表Ⅲ-7の「将来の夢」

と「将来の仕事や生活について」は、進路学習で生徒がワークシートに記入したもののから抜粋したものである。「教師からみた実態」は、前期個別の指導計画から抜粋したものである。

B 男は、1 年時の実習で、集中力や休憩時間のマナー、言葉遣い等課題が多く見られ、一般就労については厳しい面が指摘される一方で、ピッキング課題で作業に集中して取り組み、ワークサンプル（幕張版）（MWS）のレベル 5 までミスなく取り組むことができた生徒である。一般就労が適しているのか、就労移行支援事業所や就労継続支援事業所の利用が適しているのか判断に迷う状況にあった。

そこで、B 男にとって就労に向けて今後どう取り組んでいくことが適切なのを見極めることを目的に 2 年前期の実習を行った。

表Ⅲ－7 B 男の実態（実習前）

	将来の夢	将来の仕事や生活について	教師からみた実態
	生徒が記入したもの	生徒が記入したもののから抜粋	個別の指導計画から抜粋
B 男	自分一人で買い物を する	<ul style="list-style-type: none"> ・職場はバスや電車で行けると ころがいい ・自宅で生活したい 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が苦手なことがらには気づいて いない ・注意が続かないことや散漫になる ことが多いが、好きな作業等には集中 して取り組める ・携帯電話の練習を始めた

②企業就労アセスメント実習の様子

A 社では、集中力が続かず、フロアのモップがけの際に鏡や店内の物品に気を取られ、手が止まることが多く、作業精度も低かった。

B 社では、製品を包装するときのパンチでの穴あけ・ホッチキス止めは集中してできたが、一般的に集中力が続かず、独語や無断離席があり、作業中の電話や人の出入り等の刺激に気を取られる等して作業の手が止まることも多かった。また、休憩中にテレビの前に移動し通行の妨げになったりする等マナー面の問題も見られた。

前期実習の結果、C 社での作業内容と B 男の集中力や行動面の課題から判断し、夏期追加実習は見送りとなった。

③実習後の振り返り

実習後の振り返りでは、A 社のモップがけについて「ほこりがあちこちで、さがすのが大変」「お客さんは気にならなかった」、B 社のキーホルダーの汚れ落としは「とりにくくて難しかった」等具体的な感想は持つことができた。

だが、実習後に希望職種と自己評価についてのアンケートを行ったところ、「そうじ」や「つくる仕事」についても「とてもうまくできる」という自己評価をしており、体験と自分の得意不得意を関連付けて考えることが苦手で、実際の姿と自己評価に開きがあると推測された。

④高等部教員全員によるケース検討会

後期現場実習は、B 男の特性を理解してくれる実習先であること、広い場所は注意が散漫になりがちなので、限定されたスペースで特定の作業に取り組める実習先であること、ということ

考慮して、就労継続支援 A 型事業所で野菜の皮むきを中心とした実習を提案し、本人・保護者と共通理解をした。

B 男は、野菜の皮むきには集中して取り組むことができ、技能が上達した結果、仕込み作業もさせてもらうことができた。仕込み作業では、鍋の熱さや中身がコック服に飛んで汚れたこと等で集中が途切れてしまう点は課題となったが、B 男にとって適性が認められる実習となった。

後期現場実習後、再度アンケートを取ったところ、ワークシートの将来やりたい仕事の欄に、実習先である就労継続支援 A 型事業所の名前を記入していたことから、B 男にとって充実した実習であったことが推測される。また、作業学習で所属しているパッケージグループでは、以前よりも集中を欠く場面が減少してきている。

(2) 事例 2 (F 子・2 年生)「企業就労アセスメント実習の実施により現場実習先の選定が適当だったと認められる事例」

①生徒の実態

F 子は、1 年後期の企業就労アセスメント実習、その後 7 日間の追加実習、2 年前期の企業就労アセスメント実習を行った。表Ⅲ-8 の見方は、B 男と同様である。

1 年時には天候の変化により精神的に不安定になったり、2 年進級時には体調不良による欠席が長期化したりする等メンタル面、フィジカル面で不安があった生徒である。まず、第一に、一般就労に必要な気力、体力があるかどうかの見極めが必要と考えられた。

表Ⅲ-8 F 子の実態(実習前)

	将来の夢	将来の仕事や生活について	教師からみた実態
	生徒が記入したもの	生徒が記入したものから抜粋	個別の指導計画から抜粋
F 子	おもちゃ売り場のレジ係	<ul style="list-style-type: none"> ・職場は家から歩いていけるところがいい ・自宅で家族と生活したい 	<ul style="list-style-type: none"> ・2 年生に進級した 4 月に欠席し、やや長期化した ・初めてのことや自信がないことに対し、消極的になり、表情で訴えることがある ・挨拶、返事ができる

②企業就労アセスメント実習の様子

A 社のフロアのモップかけでは、後半になると動きが遅くなり、ほこりの取り残しが増え、その場に立ったまましている状況もあった。

B 社では、担当社員の説明の最中に作業を始めようとし、就労移行支援事業所の支援員に最後まで聞くよう注意される場面があった。また、実習中、疲れてくると作業精度が下がる点が指摘された。しかし、慣れてきた作業についてはスムーズに準備をして作業を続けることができた。

1 年時の実習と比べ、前期実習において改善されつつある点としては、「身だしなみ」が挙げられる。1 年時は、作業時に顔が髪の毛で隠れている、服装が体に合っていない等の指摘があったが、事後に髪の毛について指導したことや、事前にビジネスシーンに合った服装についてサンプルを示したことに効果があったと思われる。また、欠席することなく前期実習を終え、当初心配された気力、体力面については大きな問題とはならなかった。

夏期追加実習については、良い返事ができ作業終了の報告ができる一方で、実際の仕上がり

十分ではない点と C 社での作業内容に照らした巧緻性の観点から見送りとなった。

③実習後の振り返り

就労移行支援事業所で行なった実習後のケース会では、F 子が実習前に立てた「お話を聞いて、正確に作業します」という仕事の目標には、「ミスしたところもありました」と振り返った。また、「体調をしっかりと整えて出勤します」という生活の目標には、「すべて休まず元気に出勤できました」と振り返った。しかし、疲れたことがなかったか問われると、「A 社のフロアのモップがけで疲れました」と答えた。理由としては「お客さんが多かったから、どうしていいか分からなかった」ということであった。

④高等部教師全員によるケース検討会

前期実習と学校の作業学習を比較したところ、1 回の指示だけでは、たとえ返事が良くても、理解が十分できていないと思われる点は同意見であった。また、F 子は手順がはっきりして見通しが持てる作業には安定して取り組めるが、作業の意味の理解が不十分な作業の場合は回数を重ねても、手順が抜けたり雑になったりする面が明らかになってきた。さらに、A 社での実習で「どうしていいか分からなくなった」ように、場に応じた対応が苦手な点もはっきりしてきた。気持ちに波がありそれが仕事に影響を与えてしまうことや、慣れない初めての仕事でミスがあった場合に教師に報告ができず、確認が必要になってしまう、といった課題も分かってきた。対人関係では、会話の相手が教師中心で同じ会話を繰り返す傾向も挙げられた。

後期現場実習先の選定にあたっては、上記に述べたような、F 子の、返事の良さと実際の理解度の違い等作業上の様々な課題を鑑み、きめ細やかなマニュアルで作業内容が確認できること、手順が抜けたり雑になったりした時や場に応じた対応の仕方、作業の意味等について、適宜、指導を受けることが期待できる企業であること、また、気持ちに波があることや会話相手の偏りを考慮し、ジョブコーチが常駐する企業を考えた。

清掃については、前述のとおり A 社での実習でフロアのモップがけを行った際、ほこりの取り残しが多く後半疲れを見せる等、決して良い評価ができる様子ではなかった。しかし、実習後の「きれいにするしごと」についての自己評価は比較的高く、「とてもやってみたい」仕事でもあったこともあり、ジョブコーチの指導のもと、実習期間の間にどれだけマニュアルにそって正確な作業を持続できるか、という点を優先した。その結果、仕事内容は清掃でジョブコーチが常駐する企業を提案することとし、本人・保護者と共通理解をした。

後期現場実習では、事前挨拶の際にどの場所を掃除したいか聞かれた際、「トイレ掃除をやりたいです。」と答え、女子トイレの清掃をメインに実習を進めることとなった。後期現場実習では、「本当に必要な質問ができない」という点が改めて浮き彫りになる等課題も多く指摘されたが、パターン化することで正確に作業ができ、ジョブコーチのアドバイスを素直に聞いてやり直す姿勢や丁寧な言葉遣いや挨拶等が評価され、今後に期待が持てる実習となった。

(3) 事例3 (K男・1年生)「今年度からの新しい仕組みを適用した事例」

①生徒の実態

K男は今年度、地域の公立中学校から本校へ入学した。初めての環境や人前で話すことを苦手としており、声が小さかったり、考えや思いはあるが、それを言葉で表現することに時間がかかったりすることが多い。自由な意見を求めるような問いかけに対し、相手からの選択肢や回答などが出されるのを待って、それに応答するといったいわゆる「待ちの姿勢」がよく見られる。内言語や語彙力、理解力があり、考えや思いを書いて文字にしたり、話を聞いて理解したりすることができる。また、慣れた環境において、ある程度決まった文言や用意された文(原稿)などは人前でも聞こえる声で言えるようになってきた。

②企業就労アセスメント実習の様子

本人の実態に加えて初めての实習ということもあり、夏期の実習では初日、緊張や不安が見られたが、2日目以降は慣れた様子で取り組んでいた。また、後期の実習でも2週間を通して落ち着いて取り組んでいた。就労移行支援事業所の支援員からの話や、支援記録(就労移行支援事業が作成しているもの)や、本人の実習日誌等からもそのことが伺えた。

初めての人に話すことができるかどうか担任は心配していたが、当初の予想に反し、初日から報告場面で初めての人に対しても話していた。

また、「早寝・早起き」も課題の1つであったが、後期の実習では自分で起き、早めに寝ていたとの記述が実習日誌の家庭欄に書かれていた。

実習日誌や支援員からの話や記録などから、2回の実習を通して、プログラム(表Ⅲ-5)にも真面目に取り組む、実習中に受けたアドバイスや注意も素直に受け入れ、自身の課題改善や目標達成に向けて取り組んでいた印象である。

③実習後の振り返り

実習終了後には、本人と面談をして目標の達成具合や成果と課題、今後の取組などについて話し合った。さらに、後期の実習後については、前述したように、評価表を実習前後に記入するようにし、自分で付けた評価点を項目ごとに実習前後で比較していき、評価点の上った項目と下がった項目について、教師がその理由を聞き取ったり、本人が記入したりするようにした。

また、就労移行支援事業所と保護者の評価点と自分の評価点とを比較し、大きく差がある項目(2点差以上)や差がない項目(点数一致)について、自分で考える評価と他者が考える評価には違いがあることや反対に同じように評価されていることに気づくようにしたり、三者が共通して点数の低い(高い)項目は何か、またその理由を考えたりするようにした。

そして、面談の過程で、生徒から出た感想や意見、実習日誌等書かれたことなどから、生徒の内面の変容を推察するようにした。

2度の実習を終えての本人の自己評価(振り返り)の一部を表Ⅲ-9に示す。なお、内容については、実習日誌や実習後の生徒との面談に依るものである。

表Ⅲ－9 K男の実習後の自己評価

実習時期 期間	自己評価(振り返り)
夏期 3日間	<ul style="list-style-type: none"> ・最初は緊張したけど、2日目からは慣れた。 ・作業が終わった時の報告ができるようになった。 ・課題は、「わからないことは早めに聞きに行くこと」と「返事をする事」。 ・作業で分からないことがあったら早めに聞きに行くようにしたい。
後期 2週間	<ul style="list-style-type: none"> ・返事をする事が目標だったが、達成できなかった。 ・聞こえるくらいの声を毎回出せなかった。後半は比較的返事ができた。 ・前回より、早く質問に行くことができたが、遅くなったこともあった。 ・爪きりやベルトについては忘れたこともあったが、寝ぐせなどは出勤前に鏡でチェックできた。 ・作業以外の時も報告や連絡もすること、ミスがないか見直しをすることが課題だった。 ・学校でも、連絡や相談、返事を意識して行うようにする。

夏期に出た課題（わからない事は早めに聞きに行くことと返事をする事）を、後期の実習で改善しようと目標に置いて実習に臨んだK男であったが、早めに質問に行くことは前回よりできたが、返事をするという目標についてはあまり達成できなかったと振り返っていた。

また、爪やベルトなどの身だしなみについてや、作業のミスがないか確認することも新しく課題として挙げていた。

2度実習があることで、比較することや自分自身の変化を見ることができ、自己の課題をより認識したり、新たな課題に気づいたりすることができた。

次に、後期の実習前後で行った評価表を用いた振り返りについて、述べる。評価表を用いて、生徒との面談と高等部全体でのケース検討会を行った。

次の表Ⅲ－10は、本人・就労移行支援事業所・保護者が評価した評価点をまとめたものである。

表Ⅲ－１０ 企業就労アセスメント実習評価表 評価点集計

大項目	項目	説明	本人		就労移行 支援事業所	保護者
			実習前	実習後	実習後	実習後
生活 習慣	起床・就寝	自分で寝る・起きる、出勤に間に合うよう起きる	2	5		3
	身だしなみ①	寝ぐせ直し、鼻毛やムダ毛の処理、ひげそり、爪切	1	3	3	4
	身だしなみ②	洗顔、歯みがき、入浴(シャワー)を毎日	3	3	2	4
	清潔①	着替え、汗やにおいの処理など、身体をキレイにするように心がけている	4	4	2	4
	清潔②	服のシワ、汚れ、えりやそでの汚れ、黄ばみなどを気にしている 服、ハンカチやタオルなどを毎日替える、洗濯する	4	5	3	4
	体調管理	食事、睡眠、病気の予防など、体調管理に気を付ける	3	4	4	2
	服装	場に応じたシャツ、ズボン、上着、靴、ベルト、 くつ下、カバン(色や柄など)を身に付けている	5	5	3	5
コ ミュ ニ ケー ション	あいさつ	相手に聞こえる声で、場所・時間・場合に応じたあいさつができる	1	3	2	2
	返事・返答	相手に聞こえる声で、返事、返答、お礼ができる	1	2	2	3
	報告・連絡・相談	作業中や作業後に、報告・連絡・相談ができる	3	4	3	3
	質問	わからないことや、次に何をすればよいかなどを担当者に質問できる(自分で勝 手に判断しない)	3	5	3	3
	言葉遣い	丁寧な言葉づかいができる(敬語)	2	5	4	3
	聞く	相手の話を途中でさえぎらず、最後まで、相手を見ながら聞くことができる	4	5	4	4
作 業 能 力	集中・体力	1日の立ち仕事に時間いっぱい取り組める	2	4	3	
	正確さ・丁寧さ	手順や指示通りに作業ができる製品や道具などを丁寧に扱うことができる	5	4	4	
	作業スピード	時間をかけすぎずに、正確に作業ができる	4	3	3	
	遂行態度	内容に関わらず、好き嫌いで選ばず、与えられた作業(仕事)に取り組むことができる	4	5	4	
態 度	素直さ	注意、指摘、アドバイスを素直に聞き入れ、直そうとしている	4	5	4	4
	正直さ	失敗や間違いをごまかさない、言い訳をしない、先にあやまる	3	5	3	3
	耐性	イライラや疲れなどを人前で態度や言葉に出さないようにできる	2	2	3	2
	余暇・休日	休みの日に、気分をリフレッシュできる趣味や活動がある(している)	5	5		3

本人の実習前後の点数を比較すると、生徒との面談時に、本人自身が課題として挙げていた「身だしなみ」「返事」「報告・連絡・相談」「質問」(表中の太枠)については、課題として挙げているにも関わらず、点数としては上がっていた。なぜかと問うと、「自分の中では前回よりもできたから。」という理由であった。そこで、点数は上がったのに、振り返りのときに課題として挙げたのはなぜかと問うと、「支援員に注意されたことが数回あったから」と言う理由であった。また、自身の評価点と就労移行支援事業所の評価点を比べて「身だしなみとか清潔のところは自分の評価と比べると就労移行支援事業所の方が低い」と指摘していた。

自分自身ではできた・できるようになってきたと感じていても、他者から見ると十分ではないということに気づき、今後も課題として気をつけていくという課題意識をより深めることができたように感じる。生徒との面談と評価表の比較をし、教師との対話を重ね、振り返りながら、自身の気づきや学びを整理できたと考える。自己評価だけでなく、客観的評価を合わせて学びを深めている様子であった。

④高等部教員全員によるケース検討会

112 ページの「オ. 生徒の進路に関する検討会の実施」にある観点をもとに、高等部教師全員で検討した結果、K男について以下の意見が出された。

- ・ 後期の実習において、全体的に評価点が上がったのは、中学校時代の自分と比べ、自分にもできることがあるという自信や自己理解によるものではないか。
- ・ 事業所から指摘されたことに関する課題などは概ね理解しているようである。
- ・ 実習中は報告できたが、学校での授業（主に作業）では報告に来ず、待ちの姿勢が多い。この部分を自身の課題として感じることでできるような手立てが必要だ。
- ・ 報告や質問など必然性のある環境や設定をつくるのが、効果がありそうだと感じる。
- ・ K男が、「待っていれば誰かが答えを示してくれる、配慮してくれる」といった前提で行動や意思決定をしないようにしていく必要がある。
- ・ 高等部の全教員が、K男が「待ちの姿勢」の時は、「自分で話すまで待つ」、「答えを言わずに、どうすればよいか行動の選択肢を提示し、本人の判断で動くようにする」といった関わり方をするという共通理解をし、一貫してそのように関わるのはどうか。
- ・ 評価表の評価点をつけるにあたり、項目ごとに三者それぞれの評価基準をそろえておく必要があるようだ。本人や事業所、保護者が考えている評価基準にずれがあるかもしれない。

高等部の全教員で話すことで、多面的に本人についての捉えができ、多くの意見が出された。この企業就労アセスメント実習に関わる一連の取組で得たことと、普段の生活から学校側が推察する本人の見取りとを合わせ、今後必要な支援や指導方法や企業就労アセスメント実習をどう日々の指導に有効に機能させるかを考える機会となった。

4. まとめ

この取組は、就労移行支援事業所と連携した高等部進路指導の充実・改善を目指した取組である。今回取り組んだ企業就労アセスメント実習が本校における従来の進路指導の問題点の解決に向けてどう有効であったのかについて検証する。

(1) 自己決定に基づいた指導や意思決定支援

生徒が主体的に関与する進路指導の在り方を模索する中で考えられたのが企業就労アセスメント実習である。ことばを換えると「この生徒をどうしたいのか」から「この生徒がどうしたいのか」という意識の変換である。そのために進路懇談では従来の学校・家庭の二者懇談から、本人・学校・家庭の三者懇談を基本とした。懇談に本人が同席することで本人の思いや考えを直接聞くことができた。

(2) 自己選択・自己決定のための職業理解や自己理解を深めるために

○生徒と教師による振り返り

高等部1年生の早い段階で企業就労アセスメント実習の取組を行うことは、早期から生徒自身が自己理解や職業・職務理解に取り組むことになる。高等部1年生（平成28年度入学生）については、夏期に企業就労アセスメント実習を新設し後期の実習期間を延長することで、生徒自身が2回の実習を比較して課題や目標を考えたり、教師が変化を読み取ったりすることができた。

高等部2年の前期企業就労アセスメント実習後、ある生徒からは後期の現場実習先の希望職種についての申し出があり、担任・進路担当者話し合いを持った。後期の現場実習で清掃・調理補助を行ったある生徒からは、その実習について苦手だったところや上手くできたと思うところなどを自分で振り返り、次の実習では「品出しをやってみたい」という希望が出てきた。このよ

うに企業就労アセスメント実習を通して、生徒自身が自分の進路についての知識や認識をより現実に即して新たにしていき、徐々に意思を表すことができるようになってきたと感じている。

また、生徒の希望と現実が合わない場合は、生徒の自己理解を図りながら、生徒自身が納得して現実との折り合いをつけていくことも生徒による主体的な進路選択であると考えている。

（３）生徒理解をより確かなものにするために

○高等部教師全員によるケース検討会

従来は進路指導主事と担任によるケース検討会が行われていたが、今回は高等部教師全員がそれぞれの生徒の共通理解をするためにケース検討会を行った。企業就労アセスメント実習後、評価をもとに、高等部教師全員で話し合いを持つことで、生徒の得意不得意を共通理解するとともに、次の目標や実習に向けての方向性を打ち出すことができた。同時に、それぞれの教師が学習場面、生活場面で見ているの生徒の様子を出し合うことで生徒の見方が深まる効果も見られた。高等部２年生（平成 27 年度入学生）については、以前よりも生徒の適性に応じた後期現場実習先を選定できるようになってきた。

（４）企業就労アセスメント実習評価表をどう読み取るか

生徒と教師による振り返りや高等部教師全員によるケース検討会では企業就労アセスメント実習評価表を基に話し合いを行った。評価表を読み取るうえで肝腎なことは、本人・保護者・就労移行支援事業所それぞれの評価の数値の違いについて議論することである。議論を通して本人の強みや課題を把握したり、本人理解を更新したりすることができた。今後、就労移行支援事業所の評価基準を学校・保護者と共有した中で生徒自身が現状を自己理解できるようにしたい。

以上のように「就労移行支援事業所内での実習 → 施設外就労先での実習 → 企業での現場実習」と段階を踏む中で、生徒が経験を積み重ね、各実習に比較的スムーズに取り組んでいくことができたと考えている。

今後は、企業就労アセスメント実習の仕組みについては改善を重ねながら、高等部の進路指導がより一層充実するように努めていきたい。

【謝辞】

企業就労アセスメント実習の実施にあたっては、就労移行支援事業所 LIAISON（リエゾン）の皆様大変お世話になりました。紙面をお借りしてお礼申し上げます。

※企業就労アセスメント実習は、就労継続支援B型事業の利用に係るアセスメント（いわゆる「直B」のためのアセスメント）とは異なるものである。学校を卒業してすぐに就労継続支援B型を利用する生徒に対して、本校では、企業就労アセスメント実習とは別の制度にもとづくアセスメントを実施している。（いわゆる「直B」のためのアセスメントとの混同を避けるため、今年度から名称を就労アセスメント実習から企業就労アセスメント実習に変更した。）

参考文献

本校研究紀要 平成 26 年度、平成 27 年度